

家庭科の授業をデザインするアーティファクトとしての学習評価

教育デザインコース 心理学領域

平野 泰行

指導教員

有元 典文

1. はじめに

教育インターンでは、横浜市立の中学校にける家庭科の授業場面の参与観察を行った。本稿では、教育インターンにおいて得られた成果の概要を述べる。

2. 問題と先行研究の整理

家庭科は、学習内容として日常生活を取り扱う点に特徴をもつ教科である。家庭科における学習は、机上の学習のみで完結するものではなく、自身の生活を問い直す「実践の学」であり、その学習が日常の生活と乖離してしまうことは、家庭科の教育的意義を大きく減じさせる。

しかしながら、會津・森下・有元(2009)は、家庭科におけるミシン実習と、ヨット教室の指導場面の学習環境の比較より、本来日常的な実践であるはずのミシン縫いも学校に持ち込まれることで、その活動が日常場面とは異なった学校的課題となってしまうことを指摘している。ここに家庭科における学習を学校的課題としてではなく、生徒の日常生活へと連続していくものにデザインするという視座をもち、家庭科の授業デザインを行う必要があるといえる。

3. 目的

学習環境のデザイン(有元・尾出・岡本, 2011)の観点から家庭科の授業場면을記述・分析することを目的とし、教育インターンを行った。

4. 方法

横浜市立A中学校において、2012年11月から2013年2月の間に、1回4時間程度の参与観察を計10回行った。参与観察では、Gold(1958)の観察者役割の類型で言うところの「観察者としての参与者」のスタンスをとり、授業の補助にあたりと同時にフィールドノーツの作成を行った。さらに、本インターン終了時に

A中学校の家庭科教師に対し、インタビューガイドを用いた半構造的インタビューを行った。インタビューガイドは、参与観察を通し作成されたフィールドノーツを元に作成されたものであった。

5. 結果と考察

参与観察を行う中で、教師の学習環境のデザインの一つとして「学習評価」に着目した。A中学校の家庭科の授業では、ワークシートや教師の発問一つ一つに評価の文脈が埋め込まれていた。これらは、観点別学習評価(「関心・意欲・態度」「思考・判断・表現」「技能」「知識・理解」)に基づくものであった。

生徒達の様子から、「何をやれば成績がAになりますか」などの発話が多く見られた。このように生徒達は、授業の中の評価の文脈を参照し、学習の動機を形成していた。この生徒達にとって、学習が良い成績を得るための「交換価値」として機能していたと考えられる。

インタビューにおいて、教師は「家庭生活が直に反映される家庭科において、何を評価の対象とするかを定めることは難しい」と困難を感じながら、観点別学習評価に則って授業をデザインしていることが明らかになった。

以上より、学習評価も学習環境のデザインにおけるアーティファクトの一つであると考えられる。何を評価の対象とするのか、どのような方法で評価するのかによって、教師による授業のデザインのみならず、生徒の動機や活動も変化することが考えられる。

6. 今後の展望

以上、教育インターンにおいて得られた成果は、家庭科における学習環境のデザインを考える上での端緒となるものであった。今後、学習環境のデザインとしての学習評価に着目し、学習評価と実際の授業との関連を精緻に記述・分析していく必要があると考えられる。